
おれはお前が好き

種原美穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれはお前が好き

【Nコード】

N7059F

【作者名】

種原美穂

【あらすじ】

幼稚園・小学校・中学校と同じ「腐れ縁」の関係。しかし、「腐れ縁」は切れかけていた。そんな時期の男女を描いた物語、男視点Ver。

幼稚園で初めて知った、1人の女。

その女の名は 「田口椎奈」。

幼稚園年少で、その女と出会った。（当時の）おれとしての感想は「ふん……、まあまあ可愛いな」。

そんな幼稚園に通っていたガキのおれは、この「田口椎奈」を特別な視点で見えるようになるのは おれが幼稚園年長の時だった、
……………気がする。

幼稚園年長。何故か、おれは年少・年中まで「田口椎奈」と同じ組だったが、年長にまでなつてまた同じ組になった。

「どれだけ神様はこんな女と一緒に組にしゃがるんだ」 ガキ
だった頃のおれは、そんなことを思っていた。

けれど、知らなかったんだ。ガキだった頃のおれには。

当時、おれの親友だったＹ（名前は忘れた。しょうがないだろ）は、突然、当時ガキだったおれに告白した。その告白内容は「田口椎奈が好きだから、協力しろ」という、幼稚園児だったおれにはちよつと縁が離れていた内容のものであった。

確か、おれはＹに「田口椎奈のどんなところが好きなのか」を聞いたような気がする。Ｙの返答は「可愛いし、優しいから」だったような気がする。年少・年中・年長と同じ組だった「田口椎奈」と

は、1回も話したことがない。ずっと同じ組だったけど。どうせいい機会を与えてもらったんだ。おれは、「田口椎奈」に近づいてみた。

……女と接したことがないおれにとって、女と話すのは、とても緊張するものだ。しかも相手が、当時親友だったＹが好きな女。ま、会話内容としては「あそこにいるＹがお前を呼んでるぞ」でいいだろ。

1人でスケッチブックに絵(?)を描いている「田口椎奈」に、ガチガチになつて話しかける。

「お……ち、ちち……ちよ……」

「?」

「田口椎奈」は、絵を描く手を止め、おれを見つめた。

「どーしたの?」

多分、いや絶対に、おれの全身は熱を帯びていたと思う。

「あ、あ、あ……」

そんなのおれを見つめるな! ああつ! クソツ!

パニック状態に陥ったおれは、勢いにまかせて叫んだ。

「あそこにいるＹが、お前を呼んでるぞおおっつ!」

「田口椎奈」、パチクリ。Ｙのほうから「どんがらがっしゃーん」と、何かが崩れる音が響いた。

「……Ｙくん? うん、わかった。ありがとっ!」

おれに向かって、「田口椎奈」が笑みを浮かべる。

その笑顔が、おれを虜にした。

それ以来、おれは「田口椎奈」とは関わることもなく、「卒園式」を迎えることになった。

何故か、おれは気がつけば「田口椎奈」を見つめていることが多かった。「田口椎奈」は、おれには気づいてはいなかったが、時々見せる笑顔を見ていると、おれまで笑みを浮かべてしまうのだ。

……なんだ、この気持ち。

ガキだった頃のおれには、まだ分からなかったこの思い。

「卒園式」も終わり、おれはYと会話しているところ、突然声はかけられた。

「……相馬くん、……いいかな？」

おれは反応して、声の主を見つめた。ちなみに「相馬」はおれの名前だ。

「……思い出、残したいから……一緒にお写真、撮ろっ！」

！？

「田口椎奈」は、おれを虜にした笑顔をおれに向けた。……なんでそんな表情でおれを見つめるんだあああっっ！！

「ほらっ！ 向こうで撮ろうよ！」

おれの腕を、「田口椎奈」は半ば強引に引っ張った。その気になれば、その腕を振り払うことだって可能だったはずなのに、おれはその腕を振り払うことが出来なかった。

……心臓がバクバクいってた。

「ほら、ピース！」

気がつけば、おれの隣には「田口椎奈」がいて、その先にはレンズがおれと「田口椎奈」を見つめていた。

とりあえず、おれはピースした。

「はい、いっくよー！」

パシヤリ。

「えへへ……。相馬くん、ありがとっ」

そして、「田口椎奈」はパタパタと、おれの視界からすがたを消した。

……心臓がバクバクいっていて、おれは今更になって恥ずか

しい思いをしていた。

「田口椎奈」とは、小学校まで同じだった。何故だか知らないが。とはいっても、小学生だった頃のおれには、「田口椎奈」を見つめることしかなかった。「田口椎奈」も、幼稚園が同じだった奴とグループを作り、楽しい学校生活を送っているようだった。Yとは小学校が離れた（地区が別だったからだ。ま、今となってはどうでもいいことだが）。

……もはや「腐れ縁」といってもおかしくないか？
中学校まで同じになった。

まあ、おれとしては、「田口椎奈」に対する気持ちが薄れていったまま、中学校生活までを過ごそうとしていた。まさか、あんなことがあるとは、おれにも想定範囲外だったしな。

それは、おれが中3の時。丁度今のおれと同じ時だったな。屋上で時間を潰していた（授業なんて出たくもないしな。……受験生だが）おれに、誰かの会話声が聞こえた。無性に気になったおれは、その様子を盗み聞きしていた。

「あの……ば、僕と付き合ってもらえませんかっ!？」
おれは内心、吹いた。そんな衝撃的場面を盗み聞きするとは思っていなかったおれは、思わず驚愕したからだ。

流れに逆らうことができないし、おれは（とりあえず）盗み聞きを続行した。

「ご、ごめんなさい。お気持ちは嬉しいんですけど、付き合うことはできません」

即答。

……………て、あれ？ 即答なのはいいが、この声は。

そう思っておれは告白現場を覗いた。そこには、（男子はどうでもいいので省く）「田口椎奈」がいた。

「で、でも……………椎奈さんには好きな人がいるんでしょう！？」

……………そんな噂が流れていたのか。知らんな、おれには。

「うん。いるよ。好きな人」

「……………教えて、くれる？」

……………なんていうことを言っているんだ、こいつらはああ！！
だが、無性に続きが気になるので、盗み聞きを続けた。

「……………わかった」

なんか、おれまで心臓バクバクいつてる。幼稚園の卒園式の時以来の心臓バクバクだ。

「白浜相馬くん」

……………。

……………。

何が起きているのか、おれには理解できない。

は？ 今「田口椎奈」は、何て言った？ おれの名を言った？

おれ？ は？

「相馬くんのことか、好き」

今なら、宇宙まで吹っ飛んでいけるほど、かなり全身が熱を帯びている。

どうしよう。なんか、おれ。告白されたわけでもないのに、告白された気分……………。いや、告白されているのと同じかもしれないが…

…説明不可能だ。

おれは、教室まで戻っていった。なんかこれ以上聞いていると、「田口椎奈」に見つかるかもしれないと思ったから。

「田口椎奈」に告白しようと誓ったのは、ちょうど今日だった。

もうそろそろ受験校を決めなければいけない時期。「田口椎奈」のグループの1人である友達A（分かんないんだから、しょうがないだろ）と「田口椎奈」が会話している内容を、おれは聞いていた。「椎奈は何処の高校行くか決まった？」

「うん」

「え、マジ？ 何処にすんの？」

「田口椎奈」は、少々恥ずかしがりながら、言った。

「城西女子学院」

初めて、「腐れ縁」が切れようとしたことを感じた。幼稚園、小学校、そして中学校。ずっと同じだった「縁」は、切れるのか。

幼稚園児だった頃のおれには、喜ばしいことなのかも知れない。だけど、おれはこの時、「告白しよう」と、誓った。

さすがに、おれは女子校に入学するのは無理なので、「卒業式」に告白することを決意した。

そして、告白の日 「卒業式」は来た。

おれは、「田口椎奈」のすがたを搜した。どこにいった。屋上へのドアを開けた時、そこには、卒業証書が入った筒を手にする少女が おれが来るのを待っていたかのように、見つめていた。

おれは呼吸を整えながら、「田口玲奈」のもとへ近寄った。
「ね、相馬くん。写真、撮ろうか」

！？…………まさか。

「このまま卒業しても思い出なんか残りそうにもないしね。だから、最後に相馬くんと写真が撮りたいな」

少しだけ大人びた、「田口椎奈」の笑顔。

おれはこくん、と頷き、「田口椎奈」の隣へ向かった。

「えへへ…………」

あの頃とおれは変わったなにかいない。心臓がドキドキ、バクバクだ。

「撮るよー」

パシヤリ。

「うん、ありがと」

「田口椎奈」は、カメラをスカートのポケットに入れた。

……………。

沈黙。

「ね、相馬くん。わたし、なんで相馬くんと写真撮りたかったか、知ってる？」

沈黙を破る声。おれは首を横に振った。

「…………… やっぱり、わたしの……………」

「わたしの」の他にも何か話していたが、あまりにも小声だったので聞き取ることが出来なかった。

……………。

……………。

再び、沈黙。

「おれ、帰るわ」

おれはドアに向かっていこうとした。

…………… その時。

「…………… 相馬く、ん」

か細い、声。

「また、会えるよね」

見せたその笑顔。涙を流した表情。

瞬間、おれの足は自然と「田口椎奈」のもとへ向かっていた。
そして、抱きしめた。

「……そう、まくん……」

何でおれがこんなことをしているのか、分からない。ただ身体が勝手に動いていた。

いや、違う。おれ自身でも理解していたはずだ。
そう

「おれはお前が好き」

おれは、「田口椎奈」に……呟いた。

（後書き）

えーと。ですね。

短編でも書きたいなーと思って書いたのがこれになったんですよ。もともと作者である種原美穂が女なので、男の気持ちは分かりませんが、ま、「そこら辺にいる女が思ってる男の気持ちはこんなもん」程度で受けとめておいてください。

近日、女視点Verも公開予定です。

- Special thanks -

・あいちゃん（この小説の原案をアバウトに考えてくれた心優しいお友達です）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7059f/>

おれはお前が好き

2010年10月8日15時17分発行